
思春期のウェイバー・ベルベット

けーはち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思春期のウェイバー・ベルベット

【Nコード】

N0491Z

【作者名】

けーはち

【あらすじ】

ウェイバー・ベルベットとライダーとの日常のヒトコマ。ふらりと実体化して出かけたサーヴァントが買い求めて来たものを見て、ウェイバーは興奮を隠し切れない。

ウェイバー・ベルベット　思春期を、時計塔で只管魔術ひたすらの研鑽に費やしてきた少年にとって、それは刺激が強すぎた。

「お……オマエ、ボクのお金で、何買ってたんだよおっ！」

握り拳に怒り肩で苦言を呈するマスターなど何処吹く風、巨漢はどっかと胡座をかくや、ビニール包装をひっぺがし、無造作に件の雑誌のページを繰り始めた。

「ほーう……ふーむ……」

かくして征服王は首を捻りながら意味深な感嘆を上げた。

「生憎、余はミロス島のアプロディーテー像のような、引き締まった女子が好みでなあ……」

誰も聞いていないのに、神妙な面持ちで感想を独りごちる征服王。

「それと、この『アへ顔』というのは何であろう、面妖な　余には解せぬ文化であるな」

「おい！　コラ！　ライダー！　ちょっと待てっ、これは何なんだって聞いているんだ」

「お？　今の時代を生きる坊主がそのような事も知らんのか。これは漫画といってだな　」

「知ってるって！　そうじゃなくて問題は……そのお……え……」

しどろもどろ、竜頭蛇尾に声が縮こまって行く彼の言葉は、マス

ターの威厳からは縁遠い。

「ははは、そう急くな！」

鷹揚に笑うと、征服王はそれを己がマスターの眼前に突きつけた。

「心配せずとも戦利品を余一人で独占する気はないぞ。坊主も堪能するが良い。ほおれ！」

扇情的な半裸姿で白濁の粘液を舐め取る少女が表紙に描写された、それはコンビ二売りの成人向け漫画雑誌であった。

「うつわぁーっ！」

無垢なる魔道師は悲鳴を上げて、少女のような仕草で、雑誌を視界の外へ押し退ける。

「この馬鹿あ！ 何すんだよあ」

「いやいや、この余も最初は馬鹿な事と思うたぞ。この時代の情報は既に英霊の座にて聞き及んではおったが、童^{わいへ}らも自由^{かよう}に出入りする店で、よもや斯様な書物を取り扱っておるうとは」

東方への遠征に明け暮れ、異文化との接触を常としてきた大王だったが、この国の HENTAI 文化にはカルチャー・ショックを隠し切れないようである。

「だが、これだけ手軽に猥^{ポルノ}本が贖えるのであれば、さぞ女子^{おなじ}に対する、乱暴狼藉も減るであらう。この手のモノでいかに紊^{おなじ}乱な性風俗を描いておるうが所詮、印刷物よ。誰も咎^{たまもの}め立てするまい。まさしく、この時代の活版印刷文化の賜であるな！」

「冗談じゃない！ 世界中でもこの国ぐらいだよ。全く低俗な文化だ」

ウェイバーにとって日本という国は、経済と特殊な文化ばかりが発展した、極東の果ての下卑たHENTAI国家に過ぎない。彼にとってこの国で唯一好ましいところは、男たちの平均身長がそれほど高くないところだけであった。

こんな国は聖杯戦争のために訪れただけで、早くイギリスに帰りたい。

それが、心からの彼の願いである。

「そのような事を言うてからに。坊主とて嫌いでは無かるう？」

「……やつ！ やめろつてえ……もう……」

「どうした？ 坊主とて健康な男子。よもや、男女の情交セックスに興味が無いとは言つまい？」

「興味つて……そりゃ……まあ、無いと言えば嘘になるけど……とは言つても」

「ほつれ見よ！」

得意げに言いながら征服王はエロ漫画の佳境をパツクリ開き、まざまざと突きつけてくる。

「うわあっ！ やめろつて！ おっ……オマエなあー！」

「良いではないか。国を成すは人。人を識るには、こうした風俗を識るが近道。これもまた王道ぞ」

「無理勝手の理屈を言いやがって」

マスターの威風を為そうと、ウェイバーは腕組みをして、視線の定まらないまま、慥然と応える。

「オマエさあ、ボクの魔力で現界してるけど、とつくの昔に死んだ英霊なんだぞ……。英霊に、そんな欲求が、あるはずないだろう？」
「フハハ、何を言うか。『英雄、色を好む』と言うであらう？ 死してなお睦み合いを望む英霊がおつても、何もおかしくはあるまい。それに、我らサーヴァントにとって人間の精は魔力の源ぞ」

征服王は呵呵と嗤う。

「そんな……」

と口ごもりながらも、ウェイバーとて魔術師の端くれであり、人間の精が魔力へ還元されるという話は知らないはずがない。

「考えても見よ。清廉そうな顔をして、騎士王辺りは存外、夜な夜なマスターと乱れに乱れておるやも知れぬぞ」

まさか……騎士道を誰よりも拝する、あの凜と研ぎ澄ました刃のような、男装の麗人、セイバーが、夜な夜な？

「……………おい」

しかし、ウェイバーの理性は、妄想の肥大化を留め、現実には立ち戻るに十分な強さを持っていた。

「セイバーのマスターはアインツベルンのホムンクルスだろ？ 女同士じゃ、精液、関係ないじゃん」

「女同士。大いに結構。むしろ、心が躍る」

征服王は腕組みをして頬をほころばせる。

「あのなあ……………」

「……………そうだ！」

ぼん、と節くれだった拳で、掌を打つ征服王。妙な事を思い立つ

たらしい。

「……な、何だ？」

「そうそう、厨房にアレがあったよな。待っておれ、坊主」

唐突に会話を打ち切って、ライダーはウェイバーの部屋を退出する。

「何考えてんだ？ アイツ……」

ウェイバーが訝る間にそそくさと舞い戻ってきたライダーの手にあるのは、透明なボトルに緑色の輝きを放つ、粘性を持ったエキスオリーブ・オイル。

「……………そんなの、何に使うんだ？」

「知らんのか？ 古来より使われてきた、潤滑油よ」

「だから何を潤滑に」

「何をつて？ 決まっておろうが」

征服王の大きな眼がひときわ強く輝きウェイバーを見据える。

「坊主、良く見てみると、線は細いが、中々の美丈夫よの」

「……っ……………いきなり、何だよ！」

ウェイバーの瞳を覗き込む、好奇心旺盛な、それでいて鋭い、大型肉食動物のような視線。

「坊主、どうだ？ ここは一つ、余に抱かれてみんか？」

突然の征服王の提案。

ウェイバーの心臓は早鐘を打つどころか、非常警報のように悲鳴

を上げた。

「ぬぁっ……につ……！」

男子にしては長めのおかつぱにした髪をぱらぱらと乱しながら、
ウェイバーは首を横に振る。

「どうした？」

「ムリムリムリ……！ オマエ、バツカじゃないのか？ 何が
どうしてそうなるんだよ！」

「何が……？ 簡単な話であろう。精液が魔力に還元される……先
刻の展開から、十分あり得る話であろう？」

「断じて！ あり得ない！」

「坊主とて聖杯戦争を勝ち抜くため、努力が必要であると思ってお
るうが」

「それが精液である必要が何処にある！」

「邪険にするな。我らの国では、男色は究極の友情ぞ」

男色の癖にても名を馳せる大王の手練手管が、柔弱なるウェイバ
ーの細腕を捕らえて離さない。

ボイス・ラブ

「当代のこの国とてBLの文化が栄えて久しいと聞き及んでおる。
胸が高鳴るぞ！」

「何処でそんな情報を……」

そして征服王は少年を組み伏せて嗤う。

「いざ、我らも、マスターとサーヴァント以上の関係へ 魂の経^バ
路^スを通わし結ばれ合おうではないか」

獣が獲物を齧るように、その唇が妖艶に、熱っぽく語る。

「ムリムリムリ！ 体格差的に考えて絶対絶対ムーリー！」

「そう初っ端から諦めてかかるものではない。案外何とかなるもんかもしれないぞ？」

男は只管熱いポジティブ・シンキングとともに大戦略Ｔシャツを脱ぎ捨てる。

「ほれ、坊主も脱いでみよ！」

「イヤだ！ イヤ！ イヤァッ！」

身悶えして抗うも、王者の檣木のような腕に捕らえられ、矮躯の少年に、為す術もあつただろうか。

「これ、仮にも男子が無様に、花も恥じらう乙女のような声を出さない」

「オマエ、フザけんな！ 大体、精液で魔力強化されるのはサーヴァントの方だろ？ ボクをこんな風にして、何ンになるってんだッ！」

「おお、そうか……」

涙ながら、やぶれかぶれの抗議が受け入れられたかに思われたが、次の瞬間、その期待は微塵に砕かれた。

「……坊主、余に『受け』を所望するのだな」

「はあ？」

「それもまた良し。思う存分その若き精を余に注ぎ込むが良い」

征服王は現代生活に必要な不可欠な服を完全に脱ぎ捨て、精悍なる

戦人の体軀いくさびとを顕ひかにして見せた。

まさにギリシャ彫刻のような、壮健にして均整の取れた、鋼の肉体である。

「久しいのう！ 余が『受け』に回るのは王の親友たちヘタイロイ おお、竹馬の友へファイステイオン以来であろうか。フハハ！ 胸が高鳴るわ！」

征服王の硬く引き締まった下半身は、一面を剛毛が覆っており、それ一つ取っても獣王の風格を漂わせる。

「坊主！ 参れ！ 大王たる余の菊門への侵攻を許可する。存分に突き込んで参るが良い」

四ツん這いで金剛石のような尻肉をひよいと掲げ、自らピシヤリと平手打つ。

「オマエ、馬鹿じゃないの」

「馬鹿とは何だ！ お、いや、そうか、『言葉攻め』が始まっておるのか？ 余としたことが……」

「っ……」

ダメだ。何を言ってもダメだ！

ウェイバーの愕然の仕方と言ったら、最早ドン引きどころの騒ぎではない。

「どうした坊主、その浮かぬ顔は。世界に名高き余を愛でる栄誉に浴するのだ。心躍るであらう！」

「心躍らない！ 心躍らない！ ムリ！ 断じて百パーセント完全に心沈む！」

「フフ……照れおつてからに」

ドッグ・ファッション
四ツん這いを解き、ぬちゃぬちゃと潤滑油オリブ・オイルを手に馴染ませる征服王。

独特の香気が、ウェイバーの鼻孔くすくを攪る。

「そ、それを何処にどうしようつてんだ」

「難しく考えるでないぞ？ 余が手ずから導いて進ぜよう」

「要らない！ 断じてNO、THANK YOUだ！」

「遠慮は要らぬと申したはずだぞ。敬愛する余の寵愛を受けるこそ、マケドニア帝国臣民の誉ほまれであろうが」

その数多の矢傷・刀傷が刻まれた逞しい胸板を、妖しい色彩で光らせつつ、歴戦の勇者はこれ見よがしにポージングを決める。

「ボクは臣民じゃないし、そもそも………そもそもオマエを敬愛なんてしてない！」

その叫び声とともに、一瞬で、ノリノリだった全裸の巨漢は、急激に見る影もなく萎れてしまった。

「……………左様であつたか。そうか、それほどまでに、坊主は余が嫌いであつたか」

膝を抱えて、へたり込む。

「……………？」

「そうか、済まぬ。然程さほどまでに拒絶されておると思つてもおらんかった。理解が足りておらんかった。そうか、坊主は、余を、一片たりとも、敬愛も信賴もしてはおらぬと言つのだな？」

「え？ い……いや、そこまでは言っていないだろ……」

「いいや、世界中の人間から敬意を持たれ、認められる英雄であった余は、その名声に甘え、坊主の気持ちを理解できずにいたようだ。誠に遺憾である」

「……」

豪放磊落、そんな形容詞で表されるこの男に、それはまるで似合わない、萎んだ姿であった。

「そうか、致し方ない。申し訳ない。余の不徳よ。面目次第もない。そうか、そうか……そうか……」

そう言っただけ、ついぞ押し黙ったライダーに、ウェイバーは何と言っただけ声を掛けただけ、思い惑う。

「いや……その……」

心が軋み始めた。

ライダーの立ち居振る舞いを傍で見て、疎ましくも羨ましく、あるいは慕わしくすらウェイバーは感じていた。

まるで巨体が半分になったかのような、いじけた、小さくしょぼくれた風になった王者の姿など、見たくはない。

「その……拒絶は情交セックスに限った事であって……ライダーの存在まで拒絶したつもりでもないから……そこまで落ち込むなって」

どうして？ どうして、ボクがコイツを慰めなきゃならないんだああ……！

苛立ちを覚えながら、しかし、そうまでライダーに落胆されると

思わなかったので、苦心しても、フォローせずにはいられない。

「……そのっ……ボクは……サーヴァントとしてオマエを、それなりに信頼しているし……」

三角座りでどよんと沈み込んでいるライダーに、ウェイバーはなおも、しどろもどろに言葉を継ぐ。

「王として　いや、大人の男として？　それなりの敬意も、無いワケじゃ……ないけど」

俯きがちに、続けた。

「……そんな……性的な意味で……とか……それだけは、絶対ムリって」

「フハハハハ！」

果たして、呵呵大笑（かかたいしょう）の征服王。

「よう、やっと胸襟を開いてくれたな！　坊主ッ！」

三角座りから一転、油でテカった筋肉を動かしての仁王立ちだ。

「……あ？　あ……まさか、オマエ……？」

「うむ、中々、堂に入っていたであろう？　アテナイの悲劇詩人も、これほど真に迫ってはおるまい」

ウェイバーの肩が、わなわなと震える。

「……………ボクをダメしたな」

「まあ、そう言うでない！ 王たる余とて、時折^{へこ}凹^{へこ}んでみるも一興

そうして、無骨な手で長い髪を掻き乱す。オリーブ・オイルのぬめりがベチャベチャと、髪に移ってウェイバーの不快感に拍車を掛けた。

「うえええっ……………オマエ、この、人を小馬鹿にしやがってえええっ！」

「小馬鹿になどしておらぬ。言っただであらう？ 何事においても、全力で愉しみ抜くのが人生の秘訣よ！」

「……………つまり、全力で馬鹿にしたのかああ！」

ウェイバーの激昂を、ライダーは哄笑して歯牙にも掛けない。

「小さい小さい。大人になれ、坊主！ 坊主の歳の頃には、余は父王の後を継ぎ、マケドニア王として、彼の地を統べておったわ！」

「あー！ もう！ 比べるな、馬鹿！ 国も、時代も、背景がぜんっぜん違っただろーが」

ウェイバーが悲鳴を上げる。

マケドニアから遙か東方、インドにまでその名を轟^{もたら}かせた大王、アレクサンドロス三世の即位は、父王の弑^{もたら}殺^{もたら}によって齎^{もたら}されたものであった。

「見る、ヨーロッパからアジアへ渡ろうとする男が、ソファアーからソファアーへ渡ることできないとは！」

ギリシャ統一を成し遂げた直後、暗殺に倒れた父王を称して、弱

冠二十歳にして玉座を継承した大王は、こう嘲笑った。

父王を貶めてでも、昂然と己が総身を奮い立たせ、彼は一人前の男に成らざるを得なかったのだ。

父王の生き様を引継いで、彼は東征を続け、瞬く間に、彼はおよそ世界の半分をその手中に収めた。遙か遠き最果ての海を^{オケアノス}目指し、熱く駆け抜けた、三十余年の人生であつた。

「この聖杯戦争が終わつたら、余が坊主を一人前の男にしてくれようぞ。心して、待っていていよ」

そう言つて、ウェイバーの華奢な腰を、征服王は抱き締める。

「やめろ！ やめろ！」

「……フハハ、そう照れるでない」

ウェイバーは本気で拒むが、大王にとっては子猫が戯れているようなものでしかない。

「解つたから、ボクがな……」

「ん？」

「万が一、ボクが、オマエを必要としたら、そのときは頼むよ。ボクを一人前の男にしてくれよ、ライダー」

ぷいとそっぽを向いて、ウェイバーは、そんな風に応えた。

「おう、約束はきっと違えぬぞ」

少年とのその約束は、必ずや、成し遂げられることになるだろう。大王は、確信めいたものを感じて、晴れやかに破顔した。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0491z/>

思春期のウェイバー・ベルベット

2011年12月1日22時52分発行